

西南戦争で西郷隆盛率いる薩軍から熊本城を死守、 政府軍の勝利に貢献した熊本鎮台司令長官

子爵谷干城伝 略目次

<p>谷干城子と其家門</p> <ul style="list-style-type: none"> ①谷干城子の印象 ②谷家系譜 ③南学と谷家 ④干城子の生家 	<p>東征藩兵大軍監上</p> <ul style="list-style-type: none"> ①土佐藩兵の出動 ②東山道先鋒軍編成 ③甲府占拠と勝沼の戦 ④江戸駐陣と関東の情勢 ⑤安塚の役と壬生占拠 ⑥日光進撃と靈廟保存 ⑦今市駅の防禦戦 	<p>協和護国論と佐賀の乱</p> <ul style="list-style-type: none"> ③協和護国論と佐賀の乱 ④台湾蛮地事務参軍 ⑤子の辞職 ⑥高知県の政社 ⑦山内家と子 	<p>熊本鎮台司令長官 下</p> <ul style="list-style-type: none"> ①子の再起と時勢 ②鹿児島への参兵 ③熊本守城の策 ④籠城戦五十日 ⑤突圍隊の成功 ⑥熊本城連絡成る ⑦豊後方面に出動す ⑧鹿児島平定 ⑨立志社の参兵計画 ⑩子と中立社 	<p>農商務大臣</p> <ul style="list-style-type: none"> ①官制改革と子の農商務大臣 ②欧洲視察 ③時弊匡救策 ④条約改正反対意見書 ⑤谷君名誉表彰運動会 	<p>日本主義提唱</p> <ul style="list-style-type: none"> ①新聞『日本』と新保守党 ②枢密顧問官辞退 ③後藤伯と子 ④日本俱樂部 ⑤条約改正中止 ⑥子と高陽会 	<p>貴族院時代 上</p> <ul style="list-style-type: none"> ①帝国議会と子の貴族院議員 ②湖南事件 ③勤儉尚武の建議案 ④選挙干渉問題 	<p>貴族院時代 下</p> <ul style="list-style-type: none"> ①松方内閣と子 ②地租増徴に反対す ③伊藤内閣と子 ④桂内閣の出現 ⑤親露排英主義 ⑥日露戦役と子の平和論 ⑦新韓国統監伊藤博文と子 ⑧薨去 	<p>余録</p> <ul style="list-style-type: none"> ⑤鉄道会議々員と貨幣制度 ⑥調査委員長 ⑦対外硬派と条約勵行論 ⑧日清戦役と三国干渉問題 ⑨対韓政策と閔妃事件 ⑩伊藤内閣の瓦解
<p>勤王時代 上</p> <ul style="list-style-type: none"> ①桜田門事変に感奮す ②武市瑞山と吉田東洋 ③上京と国事上書 ④九州探索行 ⑤勅旨を奉じて東下す ⑥彦根藩情の探索 ⑦攘夷先鋒隊建言と御親兵 ⑧長藩救済論 	<p>勤主時代 下</p> <ul style="list-style-type: none"> ①藩の富国策と子の強兵論 ②藩札発行反対意見書 ③長崎及び上海視察 ④土佐に於ける討幕派の台頭 ⑤薩土討幕密約 ⑥討幕準備 其一〜其四 	<p>藩政維新時代</p> <ul style="list-style-type: none"> ①版籍奉還と子 ②徴士弾正少忠を辞す ③軍備の整頓と拡張 ④琴陵会議所 ⑤高知藩の三策樹立 ⑥財政改革案を提唱す ⑦十八箇条問題と子の失脚 ⑧献兵 ⑨子初めて朝官を拜す 	<p>陸軍中将現職時代</p> <ul style="list-style-type: none"> ①東部監軍部長 ②士官学校長兼戸山学校校長 ③長崎警備地移転問題と子の辞職 	<p>中正主義に立つ</p> <ul style="list-style-type: none"> ①四將軍の上表 ②中正党と子 ③山内公子の伝育 ④海南学校事務総管 ⑤学習院々々 ⑥斯文学会と斯文賞 ⑦子爵を授けSN 	<p>熊本鎮台司令長官 上</p> <ul style="list-style-type: none"> ①子熊本鎮台司令長官となる ②征韓論と其影響 	<p>東征藩兵大軍監 下</p> <ul style="list-style-type: none"> ①土佐藩兵の第二次出動 ②奥羽地方の戦況 ③米沢藩勸降書 ④会津若松城攻圍 ⑤子の米沢庄内訪問 ⑥凱旋と行賞 ⑦断金隊始末 		

子爵谷干城傳

平尾道雄 著



日本主義を首唱し、硬骨ぶりを鳴らした谷干城の反骨の生涯を詳述。この国の近代を浮彫りした名著。



マツノ書店
予約受注出版
限定番号入

■体裁 上製函入 A5版・約八〇〇頁
 ■定価 一万八千円(税込一九、四四〇円・送料別)
 ■予約特価 一万六千円(税込一七、二八〇円・送料別)
 ■特価締切 平成三十年三月十日
 ■発売予定 平成三十年四月上旬

予約限定出版 番号入
 ▼書店不卸 ▼締切厳守 ▼返本OK

山口県周南市銀座2-13
 ☎〇八三四〇二一九五
マツノ書店
 URL <http://www.matuno.com>

(注文書にある二点セット特価をご利用下さい。)

力三萬餘人に及んだ。所用の銃器はスナイドル、エンピール、ライフル、イットル、シヤール、七連銃、馬上銃等數種に及び、彈藥百五十萬發、砲兵は四斤山砲二十八門、十二斤砲二門、臼砲大小三十門で、佛蘭西式を以て訓練せられたものである。而して軍資金として準備されたものは當初七十萬圓と推算せられ、後、撫育、承惠兩社より發行消費せられた證券約六萬圓、佐土原に於て製造せられた拾圓、五圓、壹圓、五拾錢、貳拾錢、拾錢の各紙幣總額拾四萬貳千五百圓に及んだ。所謂西郷札と稱するものである。

二月十四日、別府晋介の聯合大隊は前衛として先發し、十五日は一、二番大隊、十六日は三、四番大隊、十七日は五番大隊及び砲隊の順を逐うて出陣、西郷隆盛は、桐野、村田と共に砲隊を率ゐて陣中に在つた。

三 熊本守城の策

薩軍の目的は一舉熊本城を屠つて九州を一定し、それより東上して政府改革の目的を遂げんとするに在つた。西郷小兵衛の如きは、熊本城攻陥の至難なるべき

學校黨は中原等を拷問して、西郷隆盛暗殺、私學校攪亂等の陰謀を強ひて自れ、之を表面に掲げて遂に政府問責の兵を擧ぐるに至つた。

西郷隆盛は諸方の騷亂に際しても嚴に自ら重んじ、當時は數、大を伴うて山中に狩獵しつゝあつたが、私學校黨暴發の報を得るや、遂にその制すべかを察し、深く意を決して鹿兒島に歸つた。縣令大山綱良も亦擧兵に賛してゐる所あり、將領相謀つて兵一萬二千人を部署して七個大隊を編成した。一長篠原國幹、二番大隊長村田新八、三番大隊長永山彌一郎、四番大隊長桐野利大隊長池上四郎、六番大隊長越山休藏、七番大隊長兒玉強之助、而して六番大隊を以て聯合大隊となし、別府晋助が之を率ゐた。之に砲隊、輜重隊加は至つて貴島清がまた一個大隊を編成して附屬した。西郷一たび起つての報傳はるや、隣國の有志風を望んで來投するもの多く、町田啓二郎、鮫島元の率土原隊、伊東直記、川崎新五郎の飢肥隊、大島景保の延岡隊、坂田諸潔等の高鍋等久鷹、村田量平の人吉隊、池邊吉十郎の熊本隊、平川惟一の協同隊、中津大四口隊、堀田政一等の報國隊、増田宋太郎等の中津隊等逐次參加するに及んで、

刊行にあたって

本書『子爵谷干城傳』は、歴史家故平尾道雄氏の名著で、昭和十年富山房より發行されたものであるが、干城伝記の決定版として、今日なお、その資料的価値を高く評価されている名著である。

その内容はまことに精緻をきわめ、干城の人間像を余すところなく浮き彫りにするとともに、土佐を中心とした幕末維新から明治全期に及ぶ、いわゆる明治時代史としての趣きすら備えている。

ことに本書に引用の彪大な史料は、ひとり干城研究のみにとどまらず、近現代史研究には欠かすことのできない貴重な資料とされている。

だが、この名著も、今日ではほとんど入手が不可能となり、ために研究者各位から久しく復刊を望まれていた。このたびの復刊は、こうした御要望にお応えすべく、著者の御遺族井上矩雄氏、並びに富山房の御好意を得、同書を復刻して再び世に送る次第である。

なお、復刻にあたっては、新たに、高知大学名誉教授山本大先生に『解題』を付していただき、読者各位の利用の便を図つた。

昭和五十六年八月

(象山社復刻版より引用)

『子爵谷干城伝』解題

高知大学名誉教授 山本 大

干城は南学の泰斗谷秦山の後裔で、万七景井の子として天保八年（一八三七）二月十一日、土佐国高岡郡窪川に生まれた。父は多芸多才の人で、医学を業とし武術を教えて生計を立てていたが、弘化三年（一八四六）藩校の句読役となって高知に移り、城西の桜馬場にあった谷氏本家の家に住んだ。

少年時代の干城は学問を好まなかったが、剣術・弓術・砲術など武道には熱心であった。安政元年（一八五四）の大地震で友達と腕白遊びができなくなり、孤独の日々を送る中で友人たちが軍書を読むのを見て発憤し、以後学問に専念するようになったという。それにしても秦山・垣守・真潮と碩学のつづいた家系に生まれ、のちに南学中興の祖秦山を誇りとして生きた干城であってみれば、一度火のついた学問への熱情はすさまじいものであった。

安政三年藩より遊学を命ぜられて江戸に赴き、若山勿堂・安積良斎・塩谷宕陰について学び、六年には自費留学して安井息軒の三計塾に学んだ。三計塾での足かけ三年の研鑽により干城の学問は大いにすすみ、文筆の能と漢詩の才はこの間に養われ、後年の著作の基礎が培われたのであった。万延元年（一八六〇）の桜田門外の変では現場にかけつけ、時局の容易ならざることを悟ったが、文久元年（一八六一）帰国の途中、大坂で池内蔵太・河野敏謙・武市半平太に会って時局を話し、尊王攘夷の思想を切実に感得したのであった。さらにこの思想は父の志であるが故に、この頃から実践行動を志向するようになる。

慶応三年長崎より帰国後小目付となり、再度の上京の際に板垣退助・中岡慎太郎・毛利恭助と会合し、薩摩の小松带刀・西郷隆盛・吉井幸輔と会談の結果、薩土討幕の密約を結んだ。五月二十一日のことである。帰国後軍備御用、文武調役となったが、やがて大政奉還、坂本・中岡の横死、王政復古の号令煥発と時局はめまぐるしく転回し、鳥羽伏見の戦を発端とする戊辰戦争に突入する。干城は大監察兼仕置役に昇進し、軍監として奥羽征討軍に加わって日光東照宮を救い、米沢藩に使用して降伏の交渉に成功したのであった。戦後の論功行賞で参政加役となり二百五〇石の役禄を給せられることになった。

明治維新後は藩政に参画して種々改革の意見を具申したが、大参事の板垣退助と意見があわず、のちの対立の因をつくることとなった。藩では志を得なかったが、明治四年（一八七一）兵部権大丞・陸軍大佐、翌年陸軍少将となり、軍人としての道を歩むこととなる。熊本鎮台司令長官、台湾蕃地事務参軍を経て、明治九年十一月再び熊本鎮台司令長官に任じられた。時に干城は四十歳であった。翌十年の西南の役で、熊本城において籠城五十余日に及んだことはあまりにも有名で、干城の名を不朽ならしめたのである。

明治十一年中将に昇進し、以後東部監軍部長をはじめ軍の要職を歴任したが、当局と見解を異にし、十四年軍務を解かれた。それ以来生活は一変し、三浦梧楼・曾我祐準・鳥尾小弥太の三人と提携して中正主義を主張し、同志に中政党を出現させ、政治の浄化に向かって活動をはじめた。十七年五月学習院院長となり、七月七日子爵を授けられ、ここに名実ともに子爵谷干城が誕生したのである。十八年内閣制度の発足にともない、伊藤博文内閣の農商務大臣に就任し、翌年欧州に出張したが、帰国後、政府の欧化主義を糾弾して「時弊匡救策」を建議し、「条約改正反対意見書」を提出したがいられず、大臣を辞する気骨を示した。これによって干城は真骨頂を発揮し、熊本籠城以上に名声を高めたといわれる。

明治二十三年貴族院議員となり、率直な意見を吐露して時弊を痛斥し、政府の失敗を攻撃したが、

日清戦争後の三国干渉に際し、外交上、財政上の見地から平和裡に遼東半島を返還することの妥当性を説いた。三十一年には地租をめぐる田口卯吉の増徴論に論争をいどみ、星亨の汚職事件を糾弾した。日露戦争については、国際平和と日本の経済力から考えて開戦を否とし、日英同盟の無用を論じて警世の言を放ったが、熱狂的な征露の世論を封ずることはできなかった。

明治四十二年頃から脳障害をおこし、腎臓を病み健康がすくなく、四十四年五月十三日、東京市ケ谷の自邸で世を去った。七十五歳であった。

以上は谷干城の略歴のあらましであるが、干城の活動を支えたのは妻の玖満であった。彼女は谷家とほぼ同格の国沢氏の女で、文久二年（一八六二）結婚したが、結婚式の日まで会ったことはなかったという。父のめがねにかなった良妻賢母型の女性で、内助の功をつんだが、とくに熊本籠城で士卒の慰問、傷病兵の看護、食料の確保と調理など、夫人の果たした献身的な行為は称賛的となった。干城は「我れの人となりしは、実に、我が父と我が師（安井息軒）と我が妻の恩なり」と言っているが、まさにその通りであった。夫人は干城に先立つこと一年五カ月、明治四十二年十二月十九日、心臓弁膜閉塞で死去したが、遺骨は干城とともに故郷の久万山に葬られた。

干城の回想録に『隈山詒謀録』があるが、隈山は久万山で干城はこれを号とした。家祖秦山が高知城北の秦泉寺に閑居して秦山と号したひそみにならったものであろうか。谷家の「墓の大なるは子孫衰滅の兆なり」との家訓に基づいてつくられた自然石の質素な墓が山の頂上近くにたっている。かつての部下の協力によってたてられたものである。

干城七十五年の生涯は、一貫して日本主義に貫かれていたといえよう。幕末非常の時局に際しては尊王討幕による維新回天の業の成就をめざし、維新後の版籍奉還については、封建的主従関係を絶つのは情においてのびずという考えをもっていた。自由民権運動の高揚にあたり、土佐では立志社に反対する結社として静儉社が成立し、古勤王党グループの反対運動がおこったが、干城はともにもその行きすぎを警戒して佐々木高行・土方久元らと中立社を結成したのであった。それにしても中立とはいえ、板垣退助の立志社を中心とする活動には反対し、板垣に猛烈な対立感情をあらわしている。そこにはかつての戊辰東征のときの協力的な姿はみられない。だが讒謗律・新聞紙条例・集会条例などの発布による民論の圧迫は許せないとし、反政府的な立場を明らかにしている。また西南戦争や三国干渉の際における行動も、日露戦争非戦論の展開も、当時における日本の現状をふまえ、将来をおもんばかつてのことで、日本主義に基づく信念の表現といえよう。

一面、干城はすぐれた財政手腕を発揮した人であった。幼少時の家計の苦しさを、青年時代の体験から自然と養われたものだが、維新後の藩の財政難に対し、藩政大改革の綱領を提出し、のちに農商務大臣として台閣につらなっているにもかかわらず、政策改革案を提出している。閣議で一蹴されると直ちに大臣を辞しているが、今日の行政改革を連想させるものがある。

『子爵谷干城伝』は昭和十年四月に富山房から発行された本文八〇四頁、余録一四頁、それに年譜一一頁を加えた大著である。著者の平尾氏はいうまでもなく土佐の生んだ硯学で、大正九年（一九二〇）四月二十日、二十一歳で東京代々木の山内家史編輯所に入所し、三十年間にわたって山内家史料の編纂に従事し、その業を完成させたのであった。稿本は現在山内家から歴代藩主の公紀として刊行されつつある。

平尾氏は史料の収集、編述のかたわら『新撰組史』にはじまる著作に熱情をこめて、『海援隊始末記』『陸援隊始末記』そのほかの書物を著わし、史料編纂の業が終り、戦後高知に帰ってから土佐の近世史や近代史に関する著作を相ついで出版し、その数は枚挙にいとまがない。偉大な業績を後に残して昭和五十四年五月十七日世界されたのは痛恨のきわみであるが、名著は氏の温顔とともに生きている。

昭和五十六年八月